



雲晴

秋彼岸号

「雲晴」第二十号

平成二十八年九月一日発行

貞林院 瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五-四六-五
電話(〇三)三六二七-三四一
FAX(〇三)五六九九-五九一五

おしえの花束



「人生」七訓

一、人生はたった一度きり

「あの世がある」なんて言う人もいますが、行ってみなければわかりません。とにかく、この世の人生は一度きりです。この世で幸せになりましょう。

二、人生に定年はない

会社や組織には定年がありますが、人生の定年はありません。人間、死を迎えるその一瞬まで、人生の現役です。

三、人生の主人公は自分

「オシッコがしたくなった。でも、今、忙しいから、誰か代わりに行って！」これはできません。人生も同じです。自分が主人

公になって生きていくものです。

四、人生は各駅停車の旅

人生は片道切符の旅です。ならば、各駅停車で行きましょう。特急に乗ったら通り過ぎてしまう風景を、しっかり見ておきましょう。ゆっくりだから充実するのです。

五、人生は出会いの日々

八十歳まで生きてても、心の底から「この人に会えて良かったなあ」と思える人の数は、およそ二百人とのこと。ならば、一度、ひとりひとりの出会いがありがたく、尊いですね。

六、人生はひとりでは生きられない

自分の力で生きていこうと思ったら大間違いです。多くの人やものに支えられ助けられての人生です。ひとりでは生きられませんが、迷惑をかけたりかけられたりでいいのです。

七、人生今を悔いなく

「過去を追わざれ。未来を願わざれ」お釈迦様の教えです。「今日只今、今の今に徹して充実した人生を歩みなさい」の一喝です。今、今、今の積み重ねが「人生」にほかなりません。

私がお寺に住み始めてから十二年目になります。お寺で生まれ育っていない私にとっては大変なことでした。そんな右も左もわからない時にお檀家様の事やお寺の掃除など細かい所を教え

● 反省と感謝 ●

念佛院住職 中野 良平

て下さったのが、先代住職のお母さんでした。当時で九十前だったので年相応に認知症も進んでまいりまして介護が必要になってきました。先代住職も難病を患っておりましたので私と妻で

看ることになりました。介護とは想像を絶するものでした。晩年、認知症が進んだ時には私の顔を見ても誰だかわからない状態でした。往生されてからふと考えた時にもっとやさしく接して

なので」と言われました。三十分位お話をしました。話を終えると「話せてよかった、あなたも大変だったね」と言ってくれました。その時にたくさん辛い思いをしました。同じ気持ちの方に話すことで少しでも辛さを軽減することができたのだと思いました。今ではこの経験をさせてくれた祖母に感謝しております。今でも反省ばかりしておりますが、その反対に反省のきっかけになる人や心を大切にして、感謝の気持ちを忘れない様に生きていきたいです。



民話の宝箱

(群馬県)

文福茶釜 ● おもしろや



むかし、あるところに爺さんと婆さんとおつて、貧乏暮らしをしようとつたところとき婆さんが、

「ぼくれとるなあ」「しよぼくれたくもなるわい。これからさむうなるちゆうに金は無いし、困ったことじゃ」

「爺さんや、今日は少しぬくいから買物に行つてくれませんかかう」と頼んだので、爺さんは町へ：

「ふんなら、おらが茶釜(ちやがま)に化けてあげる。そいつをお寺和尚さんに売りつけるといい」

ところがお金をほんの少ししか持つていないのでたいした買物は出来なかったと。で、帰りにとぼら、とぼら林の中を通り抜けておると狸に

「ほう？そんなことが出けるんか」「出来るとも、三両には売れるさ」「ほうか、ほうかそんならお願えずるか」

「じいさん、じいさん、えらいしょ

爺さんと狸はお寺の前までやつて来

た。すると狸は、くるつとひっくり返つて、いい茶釜に化けたと。どこから見ても立派なものだ。爺さんは、そいつを風呂敷に包んでお寺へ入つて行つた。

「和尚さん、和尚さん、珍しいものを手に入れましたんで。持つてまいりました。金の茶釜でござえますだが、買ってもらえんじやろか」

和尚さんは手にとつてながめまわし指ではじいてみた。

「いい鳴音(なりね)じゃあ、これはいたいしたものじゃ、もろとく、いくらじゃな」

「へえ三両では」

和尚さんは、値打ちものじゃあ仕方なからうと三両で買つてくれたと。

一口法話



還愚

仏教では、お釈迦様入滅後、時代とともに教えは衰退し(正像末の三時観)、人間はどんどん悪く穢れ、環境は劣悪になっていく(五濁)と説かれています。時代がすすむにつれ、社会環境が変わり、人柄もどんどん変わってまいりました。

平和に見えても朝鮮半島やパレスチナやアフガニスタン、シリアなどいたるところで争いが絶えません。戦争に正しい戦争というものはありません。また、便利さや快適さを求める人間のエゴが、CO2の削減基準を後退しかねない状態であります。法然上人はそんな私たち人間の姿に対し、ご自身を「知徳不足」、「愚癡の法然房」とまで仰せられ、末法の時代に生きる人間の存在を「愚者」とお諭し下さいました。

誘いの書

「小僧や、小僧や、今晚はこの茶釜で茶をわかして飲むとしよう。よく磨いておきなさい」
「へえ」

小僧は、いつけどおりに、井戸端でゴシゴシたわしでこすつておつたら、なんと茶釜がものを言ったと。『いってて。これ小僧や、そろそろ洗え。尻がはげる』

小僧はびつくりして、和尚のところへ飛んで行って言った

「和尚さまあ、茶釜がものを言った

『そろそろ洗え』って言ったあ」

「そうか、いい茶釜だからな、音が響いてそう聞こえるんじや。磨くのはもうそれくらいにして湯をわかせ」

「へえ」
小僧が水を入れてかまどに掛け、火

を焚きつけると、



「あちちちち、これ小僧や、熱(あつ)いからちよろちよろたけ」
小僧はまたまたびつくりして、和尚さまのところへとんでいった。

「和尚さま、今度は『熱いから、ちよろちよろたけ』って言ったあ」

「そうか、値打ちもんだからな、チンチンって音がそう聞こえるんじや。そろそろ湯を汲むがいい」

小僧がかまどへ戻ってみれば茶釜から、みるみるうちに、足が出る、手が出る、尻尾がはえる。

「和尚さまあ、大変だあ」

と呼んどうちに本当の狸になって、ギャンギャン鳴いて、山へとんで逃げ

ていったと。

おしまい

行草書で書かれたこの句は、戦前の詩人種田山頭火による句の一節です。黄緑の木々の若葉がまぶしく生き生きとしている。柿の若葉が澄み切った青空に輝いて見える。こんな素晴らしい大自然の懐に抱かれてまだこの体が元気に動いていることは、なんて有難いことだろう。自然との対話、畏敬の中から仏の慈愛が感じられる。という意味合いでしょう。

まもなくお彼岸を迎えますが、秋の彼岸は実りの秋、収穫にあたる

柿の実も段々色づいてくる時期となりませんが、中国唐代の古い書物に「柿樹有七絶」とあり、柿には七つの優れた特徴があると書かれています。七絶とは七つの絶妙な素晴らしいものがあるという意味です。

一には樹齡が長い、二には葉が木陰を作る、三には鳥が巢を作ら

ない、四には虫がつかない、五には紅葉が美しい、六には実が美味しい、七には落ち葉が肥料になる

とあります。

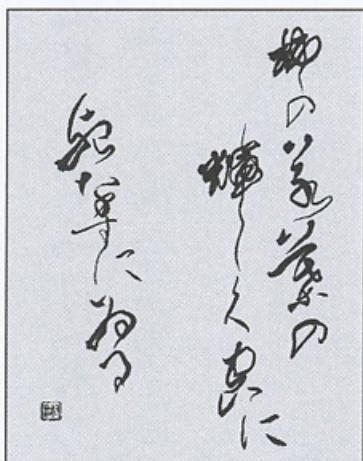
先代林錦洞も柿の木が大好きで、三田の貞林寺にいる頃は、書齋から見える若葉や赤く熟れた実をよく眺めておりました。

ちなみに先代は「柿絶齋」という別号も持っていました。これも柿に対して特別な思いがあったのかもしれない。

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

故林 錦洞書

柿の若葉の輝く空に
死なずにゐる」



貞林院瑞正寺 住職 林 清方

故林 錦洞書

柿の若葉の輝く空に
死なずにゐる」

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

故林 錦洞書

秋の彼岸は実りの秋、収穫にあたる

まもなくお彼岸を迎えますが、秋の彼岸は実りの秋、収穫にあたる

まもなくお彼岸を迎えますが、秋の彼岸は実りの秋、収穫にあたる

総本山知恩院布教師会ホームページより

「還愚」「愚癡にかえる」とは、そうした私たち自身の本来の姿を省みることであります。私たちはしっかりと自覚しなければなりません。現在、法然上人が御往生なされて八百年余たっています。阿弥陀様の御名を呼ばせて頂くお念仏を申すことで、誰でもが救われていくと法然上人はお教えになりました。南無阿弥陀仏とお呼びすることが浄土宗の教えでもあります。お念仏をお称えることで、精神も肉体も救われ、生きていることが、実感でき、心穏やかになることができるのです。

秋の彼岸法要ご案内

秋の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

九月二十二日(木) 正午より

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

塔婆料 三千元
回向料(お布施) 志納

「熊本地震復興支援

チャリティーコンサートを開催

本年四月より住職は葛飾仏教会の理事長に就任しました。葛飾区内には九十七ヶ寺の寺院があり、宗派を超えての勉強会や研修、また赤い羽根の募金など地域の活動を行っています。

本年四月の熊本地震では、大勢の被害者と建物の倒壊など甚大な被害がもたらされました。これを受けて早速仏教会としても何かできないかと思ひ、この七月七日にかつしかシンフォニーヒルズを会場として「熊

本復興支援チャリティーコンサート」を開催しました。

コンサートは、浄土真宗本願寺派の尼僧さんで奈良県教恩寺ご住職、またシンガロングライターでもある「やなせなな」さんにご出演を依頼しました。

やなせさんは東日本大震災後、何度も被災地に足を運び、仮設住宅や地元の寺でコンサートなどを行い、被災者の方々を励ましてこられました。現在でもその活動は続いており、今回のコンサートの翌日には宮城県石巻に行かれるなど精力的に活動さ

れております。

当日は約二百名の方々にご来場いただきましたが、これも各宗派のご住職方がそれぞれの寺の檀信徒に一生懸命お声かけをしてくださったお蔭です。

コンサートは、やなせさんのオリジナル曲をはじめ懐かしい童謡なども披露していただきました。またこれまで被災地の活動で感じた事、ご自身のがんと闘病体験などもユーモアを交えたトークにより会場を和ませてくれました。

会場に設置されました募金箱にも沢山の方々がご協力いただき、来場記念として配布した熊本より取り寄せた「くまもと天然岩清水KONOHANA」も好評でした。



「心にしみる歌を披露するやなせさん」
写真提供・仏教タイムス

お蔭さまで今回のチャリティーにより熊本県へ約一〇八万円を復興支援金として納めることができました。当日ご来場下さった方々には心よりお礼申し上げます。



(会場ではクマモン募金箱も大活躍)

◇これも仏教用語なの？◇

「迷惑」

仏教語でいう「迷惑」とは仏教の教えや物事の道理を理解できずに迷い、戸惑うという意味です。

インドには「自分も迷惑をかけるのだから、他人のことも許さない」という格言があります。自分が受けた迷惑は、他人にかけたものより心に残ることが多いものですが、それに執着するのではなく、許すことによつて「迷いと戸惑い」に陥らないようにしたいものです。

(浄土宗新聞「くらしの中の仏教語」より)

(貞林院瑞正寺)